



平成23年度 ブラジル通信
 9月10日(土)~9月16日(金)
 No. 2
 発行者: 宮本 朋子

パラナヴァイ地区州教育事務所訪問

ブラジルでは、1990年に義務教育制度が導入され、日本でいう小学校にあたる初等学校が4年間、中学校4年間の計8年間で義務教育としています。現在その期間を8年から9年へと移行期間中で、来年度から完全実施予定だということです。また、それぞれの管轄は異なっており、1年生~5年生(初等学校)は市の管轄で、6年生~9年生は州の管轄となっております。そこで、州の学校をまとめている教育事務所を訪問することにしました。



46の学校と12の特別支援学校をまとめています

事前に訪問予約をしていたのですが、所長が不在だったため、日本でいう学校教育課にあたる部署の方と話をしました。

| 進めている事業 | 問題点 |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・1日制学校への準備を進めている(現在2校) ・APOIO教室の全学年設置 (学習が遅れがちな生徒を支援する教室。7年前に導入された教室で、昨年度まで対象は5年生だけだった。) ・先生の研修制度 (専門教科だけでなく他の教科の指導法等を研修。この研修に参加すると証明書が発行され、給料アップにもつながる。) ・授業後のスポーツ(バレー、サッカー)への取り組み(日本の部活動のようなもの) | <ul style="list-style-type: none"> ・海外から編入してくる生徒の書類の不備 (VISAを取得せずに帰国する人が多くて困っている。また、どの学年に入れたらいいのかわからないことが多く、その都度調査しないとイケないが大変。) ・先生の不足 (給料が安く、先生の社会的地位もあまり高くないため、不足している。) ・先生の指導力の低下、勤務態度の怠慢 (きちんと指導ができない、学校に行かない先生がいる。) |

日本から帰国する日系人は、2009年に大勢帰国してきたそうですが、最近では、昨年度5人、今年2人と少ないそうです。その中でも、全くポルトガル語が話せない生徒は1人だけだったそうです。今回、私の通訳をしている岡田マリウザさん、そして3年前に通訳をしてくださった伊藤テレジーナさんは、州の学校の先生をしていたので、退職した日系人の方と連携をとり合い、協力できるような体制作りを提案しました。ブラジルに帰国して、言葉がわからず大変な思いをしている子どもたちのためにも、サポートできる環境を作っていけるよう働きかけてくださるとのことでした。

APP施設 完成記念式典参加

APP: Associação dos professores do Parana (日本でいう教員組合のようなもの)が施設を新築したということで、記念式典に参加させていただきました。教職員の待遇改善や教育条件の整備などを目的として活動しているそうですが、組合費が毎月R\$26(1リアル=約50円で計算すると、1300円)かかるそうで、入っている人のほうが少ないそうです。現在、パラナヴァイ市出身の方がパラナ州の会長をしているそうで、教職員の声や要望を届けるために、奮闘してくださっているそうです。



新築のAPPパラナヴァイ



APPの代表が勢揃い

CECAP訪問

CECAP : Centro Especial de atendimento a Criança e ao Adolescente de Paranavaí

CECAPとは、貧しい地域の子供たちに十分な教育を受けさせることを目的として作られた、放課後のクラブ（塾）のような施設です。もともと病院だったところを市から譲り受けたそうで、敷地が広く、学習施設だけでなく、集会所や運動場、菜園などもありました。市からの補助金や様々な団体からの寄付金、スーパーからは残った食べ物、チキン工場からは月に一度鶏肉が届くなど、周囲の援助のもと成り立っているのです。

ここに通える子どもは、6歳～15歳までの児童生徒で、学校のない半日をここで過ごします。授業内容も多様で、合唱、バレエ、カポエラ、絵画、サッカー、裁縫、コンピュータ、ギター、オルガン、劇、ダンス、リコーダーなどがあり、一人1～4つ選んで受けることができます。それぞれの授業レベルも高く、9月11日にアルゼンチンで行われたバレエの大会では、みごと優勝を勝ちとったそうです。授業料や食事代、教材費は一切かからず、全て無料。ただ制服（体操服）だけは各自で買わないといけないそうですが、破格の値段にびっくりしました（上：R\$8、下：R\$15）。



日本製のリコーダーで学習



施設内には子どもたちの絵画作品があみれています

現在250人の児童生徒がいるそうですが、素晴らしい教育を無料で受けることができるので、もっともっと多くの子供たちに利用してほしいと思いました。

Semana Literária : SESCにて

今週は、Semana literária（文学に親しむ週）ということで、SESCという州が管轄している施設で、いろいろな団体がブースを出して、劇やお話し会、物作り体験などをしていました。申し込みをした学校が参加できるということで、この日は3校きていました。看護婦学校のブースでは、脳の働きについて説明



人形劇を鑑賞



ブースがいっぱい

劇を終えたCECAPの生徒

をしていました。また、CECAPの生徒は、昔のブラジルの様子を劇で発表していました。どのブースでも、子どもたちが楽しみながら参加しており、学校だけでなく様々な団体と関わりあえるよい行事だと思いました。



ぷらっとブラジルク・イ・ス!

先日、巨峰に似たジャブチカバという果物を食べました。甘くてとってもおいしかったです。では、この実はどこにできるのでしょうか？

- ①土の中
- ②枝の先
- ③木の幹



巨峰と間違えました

答え：③（木の幹にいっぱいできるので、まるで虫がたくさんついているようでした。）

この他にジャッカという果物も、ブラジルにはありますよ。



ジャッカ



コソコソしています



ジャブチカバ

今はまだ小さいらしく、このくらい大きくなるそうです

日系人の子どもたちとの出会い...

今回の事業の目的の一つであるブラジルへ帰国した児童生徒の実態を把握するため、日系人のいる学校を紹介してもらい、訪問をしています。そこで運命的な出会いをした二人の生徒のことを紹介します。



日本に帰りたいよ～

通信第1号で紹介した春祭りの日、ある日系人夫婦を紹介していただきました。その奥さんの顔が豊橋で教えていた児童の母親にそっくりだったことを思い出し、聞いてみたところ姉妹であることがわかりました。その夫婦は、豊橋の柳原団地に住んでいたそうで、約1年半前に帰国しました。帰国した理由を聞いたところ、20年ほど日本で働いてきたが、とにかく忙しいこと、地震がよくあり怖いことなどから帰国を決めたそうで、今の生活には満足している様子でした。また日本に帰りたいかどうか尋ねたところ、遊びに行くのならいいけれど住みたいとは思わないそうです。その一方で、2人の子ども（15歳の息子は日本生まれ、13歳の娘はパラナヴァイ生まれ）は、日本に帰りたがっているようです。そこで、別の日に合わせてもらうようお願いしました。

13歳の娘さんは、現在8年生（日本の中学2年生）。学校では、ポルトガル語、数学、理科、社会（歴史・地理）、英語、美術（絵画のみ）、体育（この学校では、1年中男子はサッカー、女子はバレーボール）を学習しています。音楽や家庭科、部活動などはなく、午前中学校で勉強した後、午後は家に帰って過ごしているそうです。日本にいた時から、両親がポルトガル語で話しかけても日本語で答えるような生活をしていたので、ほとんどポルトガル語ができないそうです。授業の内容も数学以外はとても難しく、特に、歴史の学習についていくのに苦労しているようです。ブラジルの学校はがやがやしているため、落ち着いて勉強できないのが困るうえ、ポルトガル語の個別指導もないため、現在自力でがんばって学習しているそうです。ただ、ブラジルでは落第制度があるので、日本語学校や日系人の太鼓、よさこい、CECAPなどを利用してポルトガル語を学ぶのも一つの手段だと伝えました。彼女の両親も学校に関しては、日本の1日制の学校の方がよくて、勉強をしっかりみてくれたことに感謝しているそうです。ブラジルでも早く全ての学校が1日制になることを願っています。

二人目は、マリンス州立学校に通っている6年生の生徒です。彼女は、日本で生まれて、2年でブラジルへ帰国しました。現在父親と一緒に暮らしており、母親は群馬県に住んでいるそうです。日本語は全く話せませんが、以前から日本に関心があったようで、日本のドラマ『花より男子』やアンジェラアキの手紙という歌が大好きだそうです。そして、来年から日本にいる母親のところで暮らすことが決まっており、家では茶碗とはしを使って、ご飯を食べる練習をしているそうです。日本の中学校は勉強がとても大変で、受験もあることを話すと知っており、『勉強は好きだし、私は頭がいいから大丈夫』と、ニコニコ笑顔で話してくれました。実はこの時、彼女から3年前の調印式で私に会ったよと言われ、着物を着て出迎えてくれた日系人の子どもたちのことを思い出しました。夢と希望をもって日本に行きたい！と思ってくれることを幸せに感じ、ぜひ豊橋にも来てね！と伝えました。



2008年

こんなに大きく育ちました



現在



ウルトラマンの人形で遊んでいるよ

この他にも、津波のあった地域に住んでいて、今年の5月に帰国したという1年生の子にも会いましたが、全く日本語は話せませんでした。ただ、日本語は話せなくても親や親せきが日本に住んでいるよ、住んでいたことがあるよと、様々な形で日本とブラジルがつながっていることを子どもたちから知ることができ、この絆を大切にしていきたいと思いました。